

[論文]

『選ばれた島』の英訳本『MISSION TO OKINAWA』をめぐって

辻 央 (沖縄愛楽園交流会館)

はじめに

本稿は、青木恵哉^{あおき けいさい} (1893-1969) の前半生や^{くに}国頭愛楽園 (1952年に沖縄愛楽園と改称、以下愛楽園と略記) の開園経緯が記された『選ばれた島』^{がみ}⁽¹⁾の英訳本『MISSION TO OKINAWA』について、後述する資料群から明らかとなった英訳や発刊経緯、翻訳者、発刊年についてまとめたものである。

『選ばれた島』は、青木の受洗40周年および愛楽園開園20周年の節目にあたる1958年に非売頒布品として出版された。その発行部数は明らかではないが、晩年、青木自身の手元に本の在庫はなく、復刊を願っていたという。

青木の没後、『選ばれた島』はいくつかの展開をみせる。その初期の展開に、日本キリスト教会東京告白教会牧師の渡辺信夫 (1923-2020) 編集による復刊⁽²⁾と、本稿で扱う英訳本『MISSION TO OKINAWA』発刊がある (以下、1958年の非売頒布本を初版、渡辺編集本を復刊版と記す⁽³⁾)。

1972年復刊版の発行部数は明らかではないが、復刊版はその後いくつも版を重ねており⁽⁴⁾、ある程度の広がりをもった様子がうかがえる。復刊版

を典拠として愛楽園開園前の青木をめぐるとの状況を考察する中村文哉の一連の研究も存在する⁽⁵⁾。一方、これまで青木や『選ばれた島』をめぐるとの研究で『MISSION TO OKINAWA』について言及されることはあったが、英訳経緯や翻訳者については不明であった⁽⁶⁾。また『MISSION TO OKINAWA』そのものについての研究は見当たらない。

これまで全生病院 (現、多磨全生園) の北條民雄の「いのちの初夜」や、大島療養所 (現、大島青松園) の長田穂波^{おさだ}の詩集、同療養所のキリスト教団体霊交会の会員の文芸作品が日本語以外の言語へ翻訳されたことが指摘されているが⁽⁷⁾、翻訳の経緯や出版年など明らかではない点も多い⁽⁸⁾。

後述するように『選ばれた島』の英訳は、青木の存命中に開始されたものと『MISSION TO OKINAWA』発刊に直接結びつく青木の没後に行われたものが存在する。それぞれの英訳を担った人物を先にあげると、前者は渡口薫^{とぐち かおる}、後者はクリストファー・ウィリス (George Christopher Willis) とマーガレット・ウィリス (Margaret Lucille Willis)⁽⁹⁾、豊永伊佐子である。

- (1) 『選ばれた島』と青木恵哉については、森川恭剛「青木恵哉と『選ばれた島』」(ハンセン病問題ネットワーク沖縄編『入門沖縄のハンセン病問題—つづられた壁を越えて』(なんよう文庫、2009年) 14、15頁、阿部安成・石居人也「わたり、わたす、書き、つなぐ——青木恵哉という時空——」(リプリント ハンセン病療養所シリーズ1『選ばれた島』、近現代資料刊行会、2015年) 617-650頁参照。
- (2) 復刊経緯については、渡辺信夫『沖縄ライ園留学記』(教文館、1970年)、渡辺信夫「編者あとがき」(渡辺信夫編『選ばれた島』、新教出版社、1972年) 297、298頁参照。
- (3) 2015年に初版と復刊版を収録したリプリントが近現代資料刊行会から出版されている (監修・解説、阿部安成・石居人也)。
- (4) 著者が1998年に愛楽園を訪れた際、祈りの家教会の松岡和夫執事からいただいた復刊版は、1991年9月発行の第5版であった。第3版は600部、第4版は1982年7月に500部発行されている。祈りの家教会聖堂30周年記念誌編集委員会編『祈りの家教会聖堂30周年記念誌』(日本聖公会沖縄教区祈りの家教会、1984年) 80、81、189頁。
- (5) 中村文哉「複数の「嵐山事件」——「愛楽園」開園前の沖縄におけるハンセン病問題の一位相——」(『山口県立大学社会福祉学部紀要』第13号、2007年)、「ハンセン病罹患者の〈居場所〉—沖縄社会と〈隔離所〉—」(『山口県立大学学術情報』第1号、2008年)、「〈渡り〉が拓く〈もう一つの社会〉—後原〈隔離所〉時代の青木恵哉—」(『山口県立大学学術情報』第2号、2009年) など。
- (6) 国立国会図書館のNDLオンラインデータベースは、『MISSION TO OKINAWA』の書誌情報を、出版社は香港のChristian Book Room、出版年を197-?、著者を青木恵哉とする (最終検索2022年7月27日)。翻訳者の記載はない。
- (7) 阿部安成『島で—ハンセン病療養所の百年』(サンライズ出版、2015年) 77-80頁。田中キャサリン「ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波—キリスト教宣教師と癡文学の普及—」(『大手前大学論集』第15号、2015年) 124、125頁。
- (8) 本文に記した翻訳本以外に、次の翻訳本があることを国立ハンセン病資料館図書室の齊藤聖さんより教示いただいた。平沢保治『No Despair In Life』(訳者不明、IDEA Center for the Voices of Humanity、原書『人生に絶望はない—ハンセン病100年のたたかい』)、桜井哲夫『The Call of Tsugaru』(Charles De Wolf訳、Winds Publications、原書『津軽の声が聞こえる』)。
- (9) マーガレット・ウィリスの自伝に『Your Faithfulness Reaches to The Skies —The Story of a Reluctant Missionary』(Independently published、2022年) がある。共著者ウィリアム・アレクサンダー・ウィリス (William Alexander Willis) は次男。

本稿では、次に述べる沖縄愛楽園交流会館（以下、交流会館と略記）が所蔵する二つの資料群と英訳者の一人である豊永伊佐子のメール⁽¹⁰⁾から二つの英訳やそのつながり、『MISSION TO OKINAWA』発刊までの経緯について記していきたい。

一つ目の資料群は、『沖縄県ハンセン病証言集 沖縄愛楽園編』発刊後に、愛楽園内にある祈りの家教会の石原絹子^{いしはらきぬこ}司祭から沖縄愛楽園自治会に寄贈された資料である。青木直筆と推定される手稿と、青木に宛てられた手紙やはがき、新聞記事の切り抜き、写真などからなり、全体としては1000点を超える。ただし、青木との関連が不明なものや、青木の没後に混入したと思われるものも存在する。青木直筆と推定される手稿の割合は、全体の5%程度であり、青木が受け取った手紙や葉書がその多くを占めている。沖縄戦以前のものと推定される資料は数点で、ほかは米国統治下のものである。

二つ目は、2019年12月に豊永伊佐子から交流会館に寄贈された「Mission to Okinawa Papers」と記された箱の資料である。カナダ在住のマーガレット・ウィリスから「身の整理を始めたところ、翻訳開始時の依頼文や挿絵の原画、ノートの手書き原稿などが出てきて、焼却するつもりであったけれど、当時の思い出があまりにも懐かしく、もしそちらで保管などが出来るのならば送るので、適当に処理して欲しい」⁽¹¹⁾と豊永伊佐子に送られ、その後交流会館に寄贈されたものである。本稿では、前者を祈りの家教会資料、後者をウィリス家資料と呼びたい。

行論としては、祈りの家教会資料を中心に青木の存命中に開始された渡口薫による英訳、次いでウィリス家資料と豊永伊佐子のメールから青木の没後に行われ『MISSION TO OKINAWA』発刊に直接つながったウィリス夫妻と豊永伊佐子による英訳について確認し、二つの英訳のつながりについて述べ、最後にまとめとしたい。

1. 渡口薫による英訳

最初に、初版あとがき⁽¹²⁾に青木が記した英訳の起点について確認しておきたい⁽¹³⁾。

一九五四年十一月、私はこれ（「かるばりの道」と題した373枚の原稿——引用者注）を当時お迎えした八代主教さま（日本聖公会総裁主教）によって出版して戴くようお願いしてその原稿をお届けした。

そして一カ年余は瞬く間に過ぎ去ったが出版のことについては遂に何一つとして便りがなかった。そのときである。「あの原稿は英訳して出版してあげます」と早天に慈雨とでもいうかヘフナー司祭さま（沖縄聖公会主任）の思いがけないお話があったので私は雀躍して喜び、出版社に送ってあった原稿は早速取り戻して戴くことにし丹念に読み返して見た結果、大きな欠陥のあることを知り、どう考えても活字にする価値のないことがわかった。

青木が雀躍して喜んだという英訳の話はこれ以降登場せず、この件がどうなったのかは不明である。結果として『選ばれた島』発刊前に英訳本が出されることはなく、『MISSION TO OKINAWA』の発刊は、青木の没後となった。ヘフナーの提案した英訳の話は、立ち消えになったと推測されるが、この英訳の話は形を変え、後述するように『MISSION TO OKINAWA』へとつながった。

『選ばれた島』英訳に関する祈りの家教会資料を確認しておこう（表1）。渡口薫から青木に宛てた7通の手紙と、封筒がなく、差出人や宛名が不明ながら、内容から渡口薫の青木宛と推定される手紙が1通ある。また、封筒のみが2点ある（以下、資料は表1左端の番号を〈 〉で記す）。現在確認できる最も古い手紙は1963年6月27日付（消印6月29日）であるが、この手紙は青木からの手紙（3月16日付）への返信である。手紙に、

(10) 豊永伊佐子さんの聞き取りを予定していたが、新型コロナの感染状況が厳しく、メールの問い合わせに回答していただいた。

(11) 豊永伊佐子「青木恵哉さん自伝『選ばれた島』の英語版Mission to Okinawaについて」（2019年12月）。

(12) 復刊版では、本文の最後にあった附記と著者による「あとがき」は削除され、渡辺信夫による「解題」に、あとがき全文が引用されている。

(13) 青木恵哉『選ばれた島』（W.C.ヘフナー、1958年）267、268頁。

表1

	差出人	宛名	形態	年月日	消印
1	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（6枚）	1963年6月27日	1963年6月29日
2	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（7枚）	1967年10月29日	1967年10月31日
3	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（12枚）	1967年11月14日	1967年11月15日
4	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（4枚）	1967年12月20日	1967年12月20日
5	渡口薫	青木恵哉	手紙のみ（9枚）	年不明1月8日	
6			手紙のみ（4枚）	年月日不明	
7	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（4枚）	1968年3月7日	1968年3月9日
8	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（4枚）	年不明4月4日	年不明4月5日
9	渡口薫	青木恵哉	封筒のみ		1968年2月6日
10	渡口薫	青木恵哉	封筒のみ		

青木の療養所をめぐる旅行や青木の姉の安否を気遣う文面があることから、青木との関係は以前から時間をかけてつくられたものと推測される。この1通を除いて手紙は、1967年の秋から翌1968年の春にかけて出されている。渡口は、青木の最晩年に頻繁な手紙のやりとりをしていた人物の一人である。

渡口の経歴は定かではないが、青木と手紙のやり取りをしていた1960年代は鹿児島市在住であった。父親の遺骨を沖縄で納めたという記述から、

父方は沖縄にゆかりがあり、後述するように渡口は少なくとも1950年代初頭沖縄で暮らしていた。手紙に「私は中学校の免許と高校英語教師の仮免許はあり、栄養士、衛生検査技師の免許はあります」〈4〉とあり、いくつかの資格を所持していたようである。実際に病院の勤務経験もあったようで、加齢のため愛楽園内の重病棟に入室することが幾度もあった青木の健康を気遣う文面が度々登場する。傷の手当てに殺菌力のあるオリーブオイルを使用してみてはどうかという勧め(写真1)とともに「那覇のリュウボウ(百貨店——引用者注)やその他スーパーマーケットに食品部にきっとあると思います、那覇に出かける人にご依頼なされば如何でしょう」と具体的な入手場所の提案もあわせて記されている〈5〉。

青木と渡口の手紙のやり取りが始まった時期やきっかけは定かではないが、青木と渡口を結ぶつながりは教会であった。手紙に渡口は、「沖縄三原の聖公会で、教会内でノーマン・B・ゴッドフリー司祭様やヘフナー司祭様の英語の伝道集会のお話を青少年の中に混って座して聞き聞きする中に訳する耳が開かれ」たと英語に親しむきっかけは沖縄聖公会の伝道集会であったと記している〈3〉。ゴッドフリーとヘフナーの来沖は1951年で、ゴッドフリーの帰米は1953年である⁽¹⁴⁾。少なくとも渡口は1950年代初頭、沖縄で暮らしていたようだ。

渡口は、兄からの要請で、ロウエル・エル・ホウの「人の必要と神の行動」およびアーサー・W・

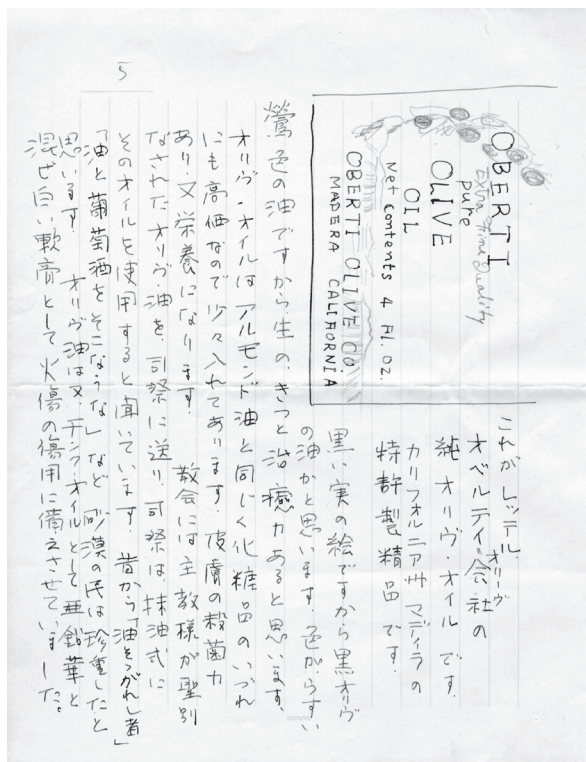


写真1

(14) 新城喬・高橋亨・棚原恵正・古見英一編『聖公会の歩み——宣教25周年記念誌』（日本聖公会沖縄教区、1976年）106頁。

ロビンソンの「精霊と個人」を訳したという一文が手紙にあり、翻訳の経験はあったようだ。ただし、「本として未だ脱稿したのではありません」ともあり、この2冊が出版されたのかはわからない〈2〉⁽¹⁵⁾。

『選ばれた島』英訳の話は、翻訳について書かれた上記〈2〉の手紙に記されている。霧島で中学校教員をしていたという渡口は、大阪救癩協会の栗山東里から『選ばれた島』を贈られたが、仕事に忙殺され、読むことができなかったという。自身の状況と『選ばれた島』の英訳について少し長くなるが引用する。

辺地の人事不足で(校長先生以下六名の職員)教科の勉強の他に、雑務が多く、仲々、御本が読めませぬ中に、土曜日直が毎週廻って来まして、とうとう――医者にかゝるため山下りも出来ませず、暮に発病、入院駆け込みましたわけで、とうとう――院内で漸く入院中に、拝読いたしました次第でございました。(中略)たゞ今は、もう注射もせず、服薬もせずとよく、専ら要心【ママ】して体力を養い家事に当って、居りますが、ふり返って考えてみますと、今再び社会に出て、仕事に向う前に、何となく、先生の「選ばれた島」のことが気にかかります。東京にいました頃、もうかれこれ十四五年になりますか、ヘフナー司祭様が、先生の原稿をお持ちになって訪ねられ、「これを訳して下さいませんか」と御依頼を受け、当時、私は語学力も未だ幼稚で、丁度腹膜炎で安静にしていた時とて、誠に申し分なく誰かが英語の出来る方にと、お断りいたしましたのでした(中略)けれども、十年経っても何年かかっても司祭様が御依頼なさったことは果されねばならないと、私は憶えて居ります。訳し終えて献じなければ心のしこりになって、いつまでも残りますので、又御霊母様ハンナ・リデル女史の御霊に怠慢は申し分けないことと存じまして甚だ身勝手なこととは存じますが、又、公のことでもありますので、その後、御本の訳本、発刊終えましたかどうか、

御連絡ありましたものか、おうかがいお赦しをお願い申しましたわけでございます。たとい、どなたかお始めになって居られるか知れませんが、私は私なりの訳し方で、又他の英語を話す群のために完え備えておかねばならない気がいたし始めの数頁にかゝって居ります。一日一頁の歩みです。

この手紙によれば、本節冒頭で引用した初版あとがきに記された英訳に、渡口が関係していたことがわかる。ヘフナーが渡口に英訳依頼をした際、青木 of 原稿を持参していたようである。しかし、渡口は自身の体調不良と語学力の不安からヘフナーの提案を断ったという。

死をも覚悟する状況からの復調であり、忙殺された日常からの解放であった渡口の入院は、『選ばれた島』を読み、「心のしこり」として残っていた英訳に改めて向き合う時間となったのだろう。英訳を「公のことでもあ」と認識する渡口は、青木に『選ばれた島』の英訳本が発刊されたかを確認している。同時に、その返答を得る前に「私は私なりの訳し方で」「始めの数頁」英訳にとりかかっており、『選ばれた島』英訳に対する強い意志を感じる。また、英訳に必要な人物や地名の読み方、補足として追加する説明への協力などが記されている。

約2週間後の手紙〈3〉には、退院後、家で養生している渡口に「沖縄聖公会時報」や「祈りの家の週報」、「あだんの実」⁽¹⁶⁾とともに見舞い金と同封されていたことが記されている。手紙には「私如きものにこの仕事をおまかせ下さいました事を感謝申し上げます」、「一途御書の翻訳にいそしむつもりで居ります」と青木から『選ばれた島』英訳について了承が得られた様子がうかがえる。

12月20日付の手紙〈4〉では、「たゞ今とりかかっていますこと、主に訳文ですが、これが来年の十月位迄かかる予定です」と英訳に必要な大まかな期間が示された。その後の手紙に「たゞ今三十三頁終えました」〈5〉、「たゞ今五七頁に来て居ります」〈7〉と進捗が記されている。

(15) 渡口が翻訳したという2冊について、2021年11月に国立国会図書館人文総合情報室で調べてもらったが、有益な情報は得られなかった。

(16) 沖縄ハンセン氏病予防協会編集発行の新聞。

前述した、英訳の課題となる人や地名の読み方について、「誠に申し分けございませんが、先生のお具合のよい時、本当にゆっくりで宜しうございますから、一度になさいませんよう、或いは安静でいらしたらどなたかに代わって書いていただいてもよろしうございますが、同封の質問欄にお答えいたゞけませんでしょうか。主に人の御名前、名称です」、「それから外人の方のお名は、もし書簡の上書きなどでお思い出し下されたらそれも宜しく願い申し上げます」と青木の体調を配慮した上で、回答を求めている〈5〉。質問項目と思われるものが残っており、おそらく7項目の質問であったと思われる。内容は回春病院2代目院主ハンナ・ライトの綴りや聖バルナバ医院のコンウォール・リーの敬称についてである。

渡口の要請に応じて青木は、様々な人へ問い合わせをしたのだろう。当時、大島青松園で園長をつとめていた野島泰治などからの回答がある。野島からの回答は1968年2月上旬、4回にわたっており、最初の回答が記された2月1日付の葉書は速達である。野島の回答内容は、青木に洗礼を授けたアメリカ人宣教師エリクソンや徳島で伝道活動をしていたアメリカ人宣教師ローガン、回春病院院主ハンナ・リデルなどの人名やハワイのカリヒ収容所の綴りであった。野島は最初の葉書で「戦前の資料を高松の戦災で焼きましたので大島の倉庫で探さねばならない」としながら、後送の葉書にカリヒ収容所の概略や1933年の患者数、保育所の人数、収容所があった場所の現在についての追加説明を記している。野島以外の回答者は分からないが、内容から回春病院と草津の教会関係者と推定される。

照会への回答は、青木から渡口に回送されたのだろう。渡口は手紙に「コンウォール・リーさん方のお名を確かめ下され、有難う存じました。又、先にはリデルさんその他、各先生方のお知らせ下さいまして有難う存じました」〈7〉と記している。

また、回春病院内の降臨教会で司祭をつとめた秋山禎範から青木に宛てられた手紙に、「貴著“選

ばれた島”が渡口さんの御盡力で英訳中の由、大変うれしいこと、存じます。(中略)どうぞそれが、実現しますように祈っています」との一文がある。渡口の『選ばれた島』英訳は、青木と渡口の二人だけが知る話ではなく、もう少し広い人々を知るものとなっていたようだ。

現在確認されている渡口からの最後の手紙は、青木が亡くなる約一年前に出されたもので、「訳文は七十四頁に至って居ります」と本文のおおよそ3割が英訳されていたようである〈8〉。この手紙でも「質問申し上げましたフリガナ付けも詳細に御答え下さいまして大変有難う存じました」という一文があり、読み方などの確認がこのときも行われていたことがうかがえる。

また、別の課題があったことも記されている。それは、『選ばれた島』に登場するハンセン病発病者の名前をどうあらわすかであった。手紙には、回春病院で療養していたハワイ人、ジョージ・カホイワイについて、次のように記されている。

ジョージ・カホイワイさんは変名にした方がやはりよろしいとのこと、ハワイ語が分らず困っていますが、一まず「ジョージ・カリオメーレ」さんとしておきましたが邦文の方とさして変らず、又気づかずに、さしさわらないと思いますが、如何がでしょうか、強いて訳せば「カリ」は沖縄のカリー（景気のよい、祝賀された、めでたい、恵み多い）(中略)「メレ」は色のついた、有色のメラネシアのメレ、(ポリネシア人の)有色・黒をもじりました、ジョージ・カリオメーレさんです。よい名があればお知らせ下さい。

ジョージ・カホイワイの変名については、後述する。

この手紙の約1年後に青木は亡くなる。渡口が青木の死をどのように知ったのかは不明だが、渡口は青木の葬儀に弔電を送っている⁽¹⁷⁾。

(17) 入園者自治会文化部編集室編「愛楽園ニュース」第9号（沖縄愛楽園入園者自治会、1969年4月）2頁。

2. ウィリス夫妻と豊永伊佐子による英訳

青木の没後に始まり『MISSION TO OKINAWA』発刊に直接つながる英訳に関わった三人の人物について、簡単にふれておきたい。

クリストファー・ウィリス（1923-2012）は、カナダから中国に移住し、伝道活動に携わっていた両親のもと、生まれている。1941年、カナダのマギル大学（McGill University）に入学し、医学を専攻。1948年に大学を卒業。同年に、病院研修の際知り合ったマーガレットと結婚した。シンガポールやボルネオ、カナダのモントリオールなどを経て、沖縄県立中部病院で研修医に臨床技術を教える講師として、1975年の夏に沖縄へ移住。病院で、カナダから帰国したばかりの豊永一隆医師と親交を深めた。1980年、モントリオールに戻る。

マーガレット・ウィリス（1927-）は、カナダのケベック州ショービルで生まれている。冬になると肺炎を患うことが度々あった父を看護した経験が、看護に興味をもつきっかけであったという。1945年、モントリオール総合病院の看護学校に入学し、1948年に卒業している。1947年にクリストファーのプロポーズを受けたが、マーガレットによれば、彼は医療宣教師になるつもりで、宣教師としてついてくることが条件であったという。各地で看護師などの仕事と伝道活動を行った。沖縄では、英語を学びたいという医師婦人会の要望を受け、聖書を教科書として英語を教える活動を行った。その会で、豊永伊佐子と出会う⁽¹⁸⁾。

豊永伊佐子（1942-）は、福岡県小倉生まれ。大学卒業後、出版社や国立病院の院長秘書として働いた後、渡米。同地で豊永一隆医師と結婚。ニューヨーク州立大学で英語を学ぶ。カナダに移住。ビザ更新のため、一時帰国した際、沖縄の病院を紹介され、1975年末に沖縄へ。1981年に再度、

渡米⁽¹⁹⁾。

ウィリス家資料を確認しておこう。ウィリス家資料は、英訳の直筆ノート、英訳本に入れる予定であった挿絵や青木関連の場所で撮影された写真、英訳のため入手したと思われる英文資料、書籍などである。内容が確認できていない手書きの英文資料もある。書籍は、英訳者の一人であるクリストファー・ウィリスの父の自伝『Unless A Grain Of Wheat...The Life of G. Christopher Willis I—A STUDY IN SPIRITUAL FRUITFULNESS』（W. A. Willis、2010年）、内田守編『ユーカリの実るを待ちて—リデルとライトの生涯—』⁽²⁰⁾（リデル・ライト記念老人ホーム、1976年）、小冊子『ESCAPED AS A BIRD』⁽²¹⁾である。

ウィリス夫妻が、青木や『選ばれた島』について、いつ、どのように知ったのかは、明らかではない。愛楽園を訪れる前に接触のあった沖縄の教会の可能性もあるが、豊永によれば、「沖縄に来る以前、東部カナダでハンセン病のミッションをしている方と知り合い、しばらくの間この病気に関するミッションを学ぶ過程で青木さんのことを知り、とても感動した」経験があったという⁽²²⁾。

『選ばれた島』英訳の件で愛楽園を訪問したウィリス夫妻について、徳田祐弼⁽²³⁾の1976年11月21日付、横田富志子⁽²⁴⁾宛ての手紙に記されている。愛楽園園長の犀川一夫⁽²⁵⁾からウィリス夫妻を紹介された徳田は、マーガレットから『選ばれた島』英訳について質問をされたという。英訳は渡口薫によってなされ、英訳草稿はブラウニング主教が預かっていると徳田が説明したところ、発刊できない理由について、さらなる質問を受けたという（句読点を適宜加えた）。

(18) W. A. Willis『Unless A Grain Of Wheat...The Life of G. Christopher Willis I—A STUDY IN SPIRITUAL FRUITFULNESS』（W. A. Willis、2010年）、前掲、Margaret L. Willis・W. A. Willis『Your Faithfulness Reaches to The Skies —The Story of a Reluctant Missionary』。

(19) 豊永伊佐子からのメール（2022年8月11日）。

(20) 徳田祐弼が1977年2月に送った書籍の一冊と思われる。

(21) 前掲、田中キャサリン「ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波—キリスト教宣教師と癩文学の普及—」124-125頁。

(22) 豊永伊佐子からのメール（2022年4月27日）。

(23) 1900年石垣島生まれ。十代でハンセン病を発病し、1920年回春病院に入院。星塚敬愛園を経て、1947年愛楽園に転園。愛楽園自治会の前身となる共愛会の総代を6期つとめる。青木と共に祈りの家教会の伝道師や執事として活動。青木の没後、祈りの家教会の司祭となる。遺稿集に祈りの家教会編『主の用なり—故司祭バルナバ徳田祐弼遺稿・追悼文集』（徳田その、1985年）がある。

(24) 日本聖公会沖縄教区の伝道師。

『それなら何故今日まで発行されないのか』と問われるので『徳田はその後の事情は存じません』。『英訳が完全でないので手を入れる必要があるのか』、『資金不足で発行が出来ないのか』。『以上の二つの中の一つだと思います』、『或は二つが、まだ英文発行の出来ない原因かも知りません』と申しあげましたら、ブラウニング主教さんに問合せ、もし資金不足が原因なら自分ウィリス夫人がその資金を出してもよい。ブラウニング主教さんに問い合せて御返事を聞かせて下さい。

『選ばれた島』の英訳の話は、横田からブラウニングへ照会され、徳田に何らかの回答があったと思われる。1977年2月22日消印の徳田のウィリス夫妻宛ての葉書には、会食に対するお礼とともに、「青木氏“選ばれた島”英訳出版よろしく御願します」とウィリス夫妻らに英訳をお願いする文面や、『ユーカリの実るを待ちてーリデルとライトの生涯—』などの書籍を送ったことが記されている。また、「運転して戴いた先生と通訳の奥様にくれ〜もよろしく」という一文も見え、この夫婦は豊永夫妻ではないかと推測される⁽²⁵⁾。おそらくこのときを含め、同年5月と11月の3回にわたって、愛楽園内や青木が沖縄で最初に拠点とした備瀬^{びせ}などの青木関連の地をめぐり、写真撮影をしたのだろう。愛楽園のある屋我地島^{やがじ}と橋でつながる奥武島^{おくむ}に建てられた「のがれの島」の碑などいくつかの場所では徳田の説明を受けたという。

その後の経緯は、豊永伊佐子によれば次のようになる⁽²⁶⁾。

「選ばれた島」(復刻版です。初版の存在は知りませんでした)を頂き、読み翻訳を勧めました。しばらくしてWillisさん達に伴われて、丘の上にあった教会に出かけ、奥に仕舞われていた重たい風呂敷包を受け取りました。それが渡口薫さんと

いう方が訳された原稿だったのです。

(中略) 当時私はカナダから帰国したばかりであり、その前にニューヨーク州立大学で英語を学んでいましたので、(中略) 本から直接訳していきしました。(中略) 当時、私には、1975年5月に生まれた娘の子育て真っ最中の合間での翻訳作業でしたので、出来た分からWillisさんにお渡ししていたと思います。何故ならより洗練された文章と、そのままの翻訳文では説明し切れないニュアンスを英語に置き替えて頂くためです。

説明を加える。豊永によれば、復刊版の感想をウィリス夫妻から求められ、読了後「素晴らしい本である。沖縄のライの歴史、特に愛楽園への道のりが詳しく一ライ者の目で描かれています」⁽²⁷⁾と答えたことが、英訳を始めるきっかけになったという。ブラウニングの下にあったという渡口の英訳草稿が返却された時期は不明であるが、数十枚の英訳草稿は牧港諸魂教会^{まきみなと}⁽²⁸⁾に保存されていた。英訳草稿は、ウィリス夫妻に貸し出されたが、その後返却したという。

英訳は、引用のように復刊版をもとに進めたという話がある一方で、「オリジナルの(中略)訳文を利用した記憶がなかったので、(カナダのマーガレットさんに—引用者注) 質問したところDr. Willisが直訳文を正しい英文に直し、それを再び私が日本語と照らし合わせて、意味が正しく訳されているかをチェックしていった」⁽²⁹⁾という話もある。両者は並行で進められたのか、後者が最初に試みられ、その後に前者となったのか、定かではない。

英訳草稿の手書きのノートは5冊あり、推敲の跡が見える(写真2)。残念ながら英訳開始や終了の日付はない。豊永によればノートの筆跡の一部は、マーガレットの文字であり、渡口の草稿や豊永伊佐子の訳文を修正しながら書かれたものではないかという。豊永やウィリス夫妻の手でまと

(25) 豊永伊佐子によれば、1977年2月にウィリス夫妻と一緒に初めて愛楽園を訪れたという。

(26) 豊永伊佐子からのメール(2022年7月21日)。

(27) 前掲、豊永伊佐子「青木恵哉さん自伝『選ばれた島』の英語版Mission to Okinawaについて」(2019年12月)。

(28) 浦添市牧港にあった諸魂教会は、沖縄県中頭郡北谷町に移転。跡地に「ポート・ヒロック」という介護付有料老人ホームが建てられている。

(29) 豊永伊佐子からのメール(2022年4月27日)。

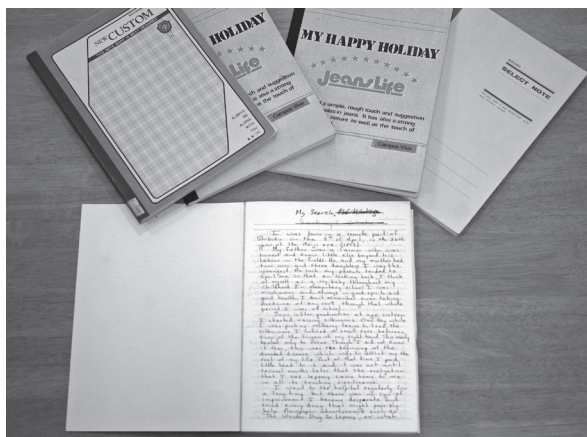


写真2



写真3

められた英訳草稿は、より洗練された英語にするため、カナダのウィリス夫妻の友人に送られ、カナダと沖縄を往復したという。

文中に挿入する絵の制作を、英訳作業とあわせて進めていたようで、9種類の挿絵がある（写真3）。『MISSION TO OKINAWA』巻頭に掲載された遍路の順路を記した地図の下絵（手前中央）は、豊永が描いたものであるという。愛楽園退所者に依頼したという残りの8枚は、紙幅の都合で掲載できなかったという。

出版は、まず沖縄の出版社にあたり、次いで講談社に打診したものの、快い返事をもらうことができず、香港でChristian Book Roomを経営していたクリストファーの姉フランシス・ウィリス（1921-2012）の協力を得て、自費出版することになったという⁽³⁰⁾。

不明となっている『MISSION TO OKINAWA』の発刊年に関して述べておきたい。ウィリス家資料にクリストファーが雑誌「Okinawa Passtime」に執筆した「BOOK REVIEW」のコピーがある。この書評には、『MISSION TO OKINAWA』が沖縄で近日発売予定であることが記されている。「Okinawa Passtime」は沖縄の米軍基地内で流通したと思われる週刊の雑誌であるが、沖縄県内の

機関にほとんど所蔵されておらず⁽³¹⁾、書評掲載号の確定はできていない。

『祈りの家教会聖堂30周年記念誌』年表、1980年4月の項に「故エパフラス青木恵哉執事の著書「選ばれた島」の英訳出版が、沖縄県立中部病院のウィルス医師の御尽力でされた。これは香港で2000部印刷（中略）300部を祈りの家教会に届けて来られた」と記載されており⁽³²⁾、『MISSION TO OKINAWA』の出版は1980年としていいだろう。

書籍は、沖縄の米軍基地内で販売が試みられたが、多くは沖縄にある聖公会の書店で販売されたという。

3. 二つの英訳のつながり

これまでみてきたように、青木の生存中に始められた渡口の『選ばれた島』英訳は初版をもとにしたものであり、青木の死後、ウィリス夫妻と豊永によって行われた英訳は復刊版をもとにしていた。前者の英訳草稿の所在は現在わからず、両者を突き合わせて確認することはできないが、両者のつながりをみていきたい。

初版と復刊版の異同や復刊版の問題点についてはすでに言及があるので⁽³³⁾、ここでは措くが、復

(30) 前掲、豊永伊佐子「青木恵哉さん自伝『選ばれた島』の英語版Mission to Okinawaについて」（2019年12月）、豊永伊佐子からのメール（2022年7月21日）。

(31) 沖縄県図書館横断検索「みーぐるぐるサーチ」で「Okinawa Passtime」を検索した結果、県立図書館と国会図書館の2館のみが該当。ともに1977年4月発行の1冊が所蔵されている（最終検索2022年9月17日）。

(32) 前掲、祈りの家教会聖堂30周年記念誌編集委員会編『祈りの家教会聖堂30周年記念誌』198頁。

(33) 末吉重人「『愛楽園』創設者の青木恵哉著『選ばれた島』について——現在流通する復刊本と初版本との異同が意味するもの」（『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第9巻第1号、2005年）、阿部安成「復刊事情——ハンセン病療養者の著作『選ばれた島』をめぐる——」（『滋賀大学経済学部Working Paper Series No.223、2015年3月』）、前掲、阿部安成・石居人也「わたり、わたす、書き、つなぐ——青木恵哉という時空——」620-625頁。

刊版「解題」で渡辺信夫が述べた変更点について確認しておきたい⁽³⁴⁾。

本書は初版本の忠実な翻刻ではない。広く読まれることを願って刊行される本書は、その方針のもとに編集しなおされた。けれども、ごくわずかりライトされただけである。古典的な意味を獲得した本書は、もはや書きなおさるべきではない。漢字を少なくし、読みにくい固有名詞に「ひらがな」を添えた程度である。ただし、救ライ史の古典に属する書物に仮名（初版においては病者の名はほとんど全部仮名であった）人物を登場させては資料としての価値がなくなるので、人名はみな調べて実名になおし（傍点は引用者による）、それに伴い文章を書き直す必要の生じたところはおした。

このように、原形をなるべくとどめたため、必要な説明はすべて注の形にして本文の後に収めた。

英訳に関して、漢字をひらがなに直した影響は大きくないように思えるが、難読固有名詞の読みをひらがなで補った点は、プラスに働いただろう。また、復刊版には4つの地図が挿入されているが、『MISSION TO OKINAWA』巻頭にそれらを参照したであろう本部半島とその周辺の地図が掲載されている。『MISSION TO OKINAWA』の目次に関しては、「初版のほぼ逐語訳となっていて、英訳目次は初版のそれに対応している」ことが阿部安成によって言及されている⁽³⁵⁾。

初版と復刊版の登場人物名を確認すると、備瀬の隔離小屋で暮らす寛一は、復刊版では比嘉権太郎となり、現在愛楽園が立地する屋我地島大堂原の土地購入を助けた康永は、復刊版では大城平永となっている。姓だけが記されていた人物については、復刊版は注で補足している。ただし、復刊

版で、登場人物の名前がすべて実名になおされたのではないことには留意したい⁽³⁶⁾。

『MISSION TO OKINAWA』の登場人物名は、前述の比嘉権太郎はKantaro Higa、大城平永はHeiei Oshiroのように復刊本文に準じているようにみえる。復刊版の注に記された名前の補足については、反映されていないようである。岸名や知念、野町は注でそれぞれの名が記されていたが、『MISSION TO OKINAWA』ではKishina、Chinen、Nomachiとなっている。一方で、復刊版では玉城平助とされた名前が、『MISSION TO OKINAWA』では初版に記された仮名、Seisuke（清助）に戻されており、英訳は復刊版を元にすべてなされたのではなく、渡口訳も参照されたと推定される。また、福岡県生まれの豊永は、訳にあたって東江などの沖縄特有の地名や人名の読み方が分からず、苦勞したという。地名や人名などの読みについても、渡口訳が参照されたと考えられる。

『MISSION TO OKINAWA』に残る渡口訳の明らかな痕跡は、回春病院のハワイ人患者の名前、George Kaliomeleである。この名前は、初版にも復刊版にも登場しないもので、青木と渡口のやり取りのなかで、渡口が提案したものであった⁽³⁷⁾。

おわりに

『選ばれた島』の英訳や『MISSION TO OKINAWA』発刊経緯、2つの英訳のつながりについてみてきた。『選ばれた島』発刊以前の1950年代半ばに登場した英訳は、立ち消えとなったように見えたが、「かるばりの道」英訳を打診された渡口薫によって、青木の最晩年に初版を元にし、始まった。渡口が英訳を始めた動機は、依頼者であるヘフナーに対する「心のしこり」、そしてハンナ・リデルの御霊に申し訳ないというものであったが、そのような後悔からだけではな

(34) 渡辺信夫「解題」（渡辺信夫編『選ばれた島』新教出版社、1972年）13頁。

(35) 前掲、阿部安成『島で—ハンセン病療養所の百年』119、120頁。

(36) 例えば渡久地の隔離小屋で暮らしていた源次郎は復刊版でも同じ名で記され、巻末の注で「玉城といたらしい」と補足されているが、沖縄キリスト教会機関誌『ゴスペル』第8号（1950年10月）に掲載された青木の「思い出の記——源次郎さんの死」では、玉城とは異なる別の姓が記されている。また、初版で太田となっていた人物は、復刊版で徳田祐弼に直されたが、前掲、祈りの家教会編『主の用なり——故司祭バルナバ徳田祐弼遺稿・追悼文集』（徳田その、1985年）に、戸籍に最初に記された名前は徳田祐弼ではなかったことが記されている。青木の資料から少なくとも徳田が青木と回春病院で暮らしていた時代は、最初に戸籍に記された名前と呼ばれていたと推定される。

(37) 表1〈8〉。

く、『選ばれた島』がキリスト教信仰をもつものにとって「得がたい貴い」本であり、世界のハンセン病発病者にとって「大いなる慰めと励まし」を与えるなどの初版を読了したことで明確になった渡口自身の理由もあった⁽³⁸⁾。「十年経っても何年かかって」英訳したいと渡口が述べ、青木をはじめとした様々な人の協力を得ながら進められていた英訳作業であったが、青木の没後、未完のまま渡口の手を離れたと推定される。渡口の手を離れることになった原因は分からないが、青木が存在や青木との手紙を通じたつながりが英訳を推進する大きな力となっていたのかもしれない。

青木の没後に始められたウィリス夫妻と豊永の英訳は、復刊版をもとにしたものであった。『MISSION TO OKINAWA』の終章Epilogueに、復刊版解題をもとにしたと思われる愛楽園開園後の青木についての記述が掲載されるなど復刊版の影響は明らかだが、渡口の英訳草稿が引き継がれることで、初版をもとにした渡口訳の痕跡が『MISSION TO OKINAWA』にのこされた。復刊版に登場しない初版の人物名が『MISSION TO OKINAWA』に登場するのは、このことに

起因していると考えられる。『MISSION TO OKINAWA』の目次立てが、阿部の指摘する「初版に対応している」要因もここにあるだろう。

英訳に際し、徳田の助力はあったが、ウィリス夫妻の自費出版で『MISSION TO OKINAWA』が発刊されたことは、祈りの家教会や聖公会の関与の希薄さや、ウィリス夫妻の自発性にもとづく企画という性格があらわれているようにみえる。

渡口とウィリス夫妻らの『選ばれた島』英訳は、組織的後ろ盾をもたないなかでそれぞれの自発的な行動にもとづいて行われたものであり、『MISSION TO OKINAWA』は様々な人の協力を得て、発刊されたものであることを、強調しておきたい。

本稿では、英訳に携わった人々の資料から論じてきたが、『選ばれた島』英訳の起点となり、また渡口の英訳草稿を保管していた聖公会が、『選ばれた島』英訳についてどのような意向をもち、関わろうとしていたのかについては分かっていない。現在所在のわからない渡口の英訳草稿についても今後の課題としたい。

(38) 表1〈2〉。